[第1部] 講演
「若い世代に伝える戦争の記憶」

写　真　家
（ドキュメンタリー・フォト）
大石芳野

「未来につなぐヒロシマの思い」というのが、今回の大きなテーマですので、私の写真をまじえた話も少しそこに触れながらという感じにしたいと思っています。今朝の新聞を見ていましたら、スーザン・スッサンさんのことが載っていました。彼女については数日前にニュースになっていましたが、父親のハーバート・スッサンさんが200枚くらいのヒロシマの写真をこのたび広島に持って来たという記事が載っておりました。1946年、原爆で破壊しつくされた市内の写真です。ハーバートさんは生前、その写真を絶対に触ってはいけない、見てはいけないときつく家族に言っていたと娘さんのスーザンさんがおっしゃっていました。原爆は本当でしたら戦争犯罪なのですが、今でもアメリカでは当然のことで500万人を救うためのものだったというようなことが公然と言われてきております。まだそれは続いていまして、オバマ大統領が、先ほど紹介がありましたけど、核兵器をはじめて使った国としては核廃絶に向けてというような話をプラハで演説したということは、大変画期的ですが、一般的にはまだトルーマン大統領の言葉が残っているかなという感じがします。けれど、三宅一生さんがニューヨークタイムズに記事を書くなど、徐々に変わってきています。それは真実を見つめていく、歴史をきちんと見つめていく、ということ。それを現在、未来にどうやってつなげていくかということは、大変に大事なことだなと思います。このスーザンさんのお父さん、ハーバート・スッサンさんは、スーザンさんの話によると、生前の彼はこの写真が世の中に出るということ、広島の46年の写真を撮ったということに対する国家からの圧力に大変おびえていたと同時に、自分の目で見た実態の恐怖に悩まされていたということを言っておられます。本当に、それが真実なわけですね。広島と長崎はそういうことで、大勢の人たちが命を奪われたのです。今、私が皆さんにお目にかけたいと思っている写真は、実は広島の被爆をされた方々の写真以外に、現在戦争が起こっている海の外の写真もあわせて少し見ていただきたいと思っています。言わずもがなですが、現在、私たちの国は戦争は直接的にはありません。ありませんが、自衛隊は海外に派兵しています。現実には私たちは爆弾を投下されたりしていません。けれど現在、海の向こうでは戦争に苦しんでいる人たちが大勢いる。苦しみによって自分の幸せを絶たれてしまった人たちがいる。そうした現実を私たちはどう受け止めていけばいいかということ。海の向こうの現在という横の軸で考えて見つめてほしいし、私は見つめていきたいなと思っています。そして、あのとき原爆で大勢の方が亡くなったわけですが、そのときかろうじて助かった今の人たちがいる。ということは、これから見ていただく海の向こうの人たちの写真の現在苦しんでいる人たちの表情が、あの64年前のここにもあったということです。広島はもちろん、日本中の500地域がアメリカ軍による空爆でひどい目にあっているわけです。ということを縦の軸に考えていただけたら、と考えて

ております。

写真を見ていただきたいので、少し暗くしていただいたほうがいいような気がします。皆さん、メモはとらないでしょうか。はじめにベトナムですが、映像がでるまでちょっと説明をします。ベトナムの写真の中で、私がここに持ってまいりましたのは、ベトナムの戦争、これが34年前に終わりましたが、この戦争の中でアメリカ軍によって、枯葉剤というものがまかれ、その被害が未だに続いている写真です。この枯葉剤は、実は農薬でして、日本でも使っていましたが、その原液を濃い目に薄めたものを散布しました。これはその結果、戦争が終わって10年後の写真ですが、かつてここは森でした。けれども森に住んでいた動物、象とかヒョウとか、さまざまな野生動物はここからは死に絶えました。ここに1本だけ木が残っていますが、これはかなり丈夫な木だったんだろうと思うような大木です。あとは全部、アメリカ軍が目的としたとおり、瓦礫野原になってしまいました。10年たって、草は生えていますが、なかなか厳しい状態が続いています。遠方に、ちょっと見えにくいかもしれませんが、富士山みたいな山が右端のほうにあります。私はここにも行きましたが、木はほとんどありませんでした。次の写真です。人間もやられました。この女の子（写真A）は父親がサイゴン軍の徴兵にあって、森の中で戦って、戦争が終わって帰って来て生まれた長女ですが、12歳くらいになっていましたが、感じとしては3歳かそれ以下という感じでした。私はこの少女に会ったとき、彼女は言葉はほとんどできないのですが、彼女は眼で本当に強く訴えている、戦争のひどさを強く訴えていると思いました。次の二人（写真B）は、北の人です。北には枯葉剤は一滴もまかれていないのですが、彼が南で戦って戻ってからこの少女が生まれました。そして重い障害を持っています。もちろん本人は体調が非常に悪いということです。これはベトちゃんドクちゃん（写真C）で日本でも有名です。1歳のときです。手前の人がベトさんです。後ろがドクさんです。手術に成功して二人は一人ひとりになりましたが、ベトさんは重い脳障害にあって、寝たきり状態でした。ドクさんは去年結婚しました。双子の赤ちゃんが生まれるそうです。結婚したときはベトさんはまだ元気だったのですが、その後亡くなりました。この枯葉剤というのは、アメリカ軍は1961年から10年間散布したといっています。けれど75年、戦争が終わるまで、アメリカ軍から受け継いだサイゴン軍が散布していたと、ベトナムでは公然といわれています。次のこの写真は実は3世代です。61年からの散布ですから4世代の人がいるかもしれない歳月がたっています。この両端にいるのがおじいさん、おばあさん。そのほかの大人はみんな二人の子どもたちです。小さな子どもがいますが二人の孫で、一番前にいる女性（ということは二人の娘ですが）の子どもです。みんな全く同じ症状の障害を持っています。この子どもたちも同じです。二人の幼い子どもたちのお母さんはこの兄弟のな

かでは症状が軽く、軽かったということもあって結婚したということですが、他の人たちは結婚していません。次のこの写真の子どもも三世代目で、生まれながらにして重い障害をもっています。ほとんど何もわかりません。彼女の澄んだ瞳というものに吸いつけられるという感じです。お母さんの娘に対する愛情の深さというものはなみなみならないという気がしました。こうしたことがベトナムでは今でも続いている現実です。

次からはラオス。不発弾と生きるというタイトルが出ていますが、不発弾・・・アメリカは、ベトナムと戦争をし、カンボジアとも戦争をした。ラオスとは戦争はしていないと言っていますが、実は戦争がありました。たくさんの爆弾が投下されました。同時にパイロットが、ベトナムで投下しないでラオスの山の中に捨てたという情報もあります。けれども実際にひどい戦争もありました。これから200年間は不発弾との戦いが続くだろうと当局が言っているくらい不発弾があります。その中の多くがクラスター爆弾です。クラスター爆弾の使用を禁止する条約のオスロ会議があって日本はそれに調印しました。アメリカ、ロシア、中国などは拒否していますね。不発弾と日々生きているというのがラオスの現実です。これは畑の中から見つかった不発弾です。クラスター爆弾ばかりではありません。様々な爆弾です。これは畑です。後ろに家がありますが、村の中です。この不発弾と生きるという意味は、このように人々の暮らしの中にあるということ。それそのものなんですね。これはなぜこんなところで爆発処理をしているのかと驚きました。爆発処理ですが、理由があります。それは動かせる爆弾類は移動させる。移動させて森の中で爆発処理をしますが、クラスター爆弾の子爆弾は動かすことができないんです。筒の容器の中に入ったたくさんの子爆弾があるわけですが、それは何回転すれば爆発すると設計されているのです。ほとんどは落としたときに爆発するのですが、残って地雷化するようにも設計されています。80回で爆発すると設計されているとすると、その地雷化したものは例えば田んぼの上に落ちたものが79回目だったとすると、ちょっと動かしただけでもう爆発します。しかしそれが10回くらいの回転だったとすると、キャッチボールをして遊んでも爆発しないと。そういうふうに設計されているわけですね。この田んぼで見つかった子爆弾は、動かすことができないために、このようにして、見つかった場所で爆発処理をするということです。家の横で見つかった場合はそこで処理をするということになります。この写真の爆弾はクラスター爆弾ではないのですが、家の庭先で見つかりました。戦争中は森の中に逃げていた人たちが、戦争が終わって、自分たちの村に戻って、暮らし始めてその後何かの拍子に見つかるというわけです。これは病院です。彼女は薪取りに行って不発弾が爆発して怪我をしました。この男の子は、後ろにいるのはお母さんですが、おじいさんと一緒に畑に来ました。おじいさんが鍬で畑を開墾しているときに鍬の先がクラスター爆弾の子爆弾に当たって爆発しておじいさんは即死。この子はそばにいて、左目をつぶされ大きな怪我をしました。これはちょっと見えにくいかもしれませんが、家はかなり壊れかけていますが、もちろんまだ人が住める状態です。ただ、床の下にある柱を見てください。これは何本かが爆弾の容器で作られています。爆弾ですからものすごく丈夫にできているのですね。丈夫な爆弾の容器を森の中で見つけて、柱として使っている。ここの家主が言うには、上は何度もやり変えたけれども、下は10年以上も使っているということでした。これは学校です。不発弾の処理隊が説明をしています。こういうものは、見つけたらすぐ連絡をするようにというものです。

次からはカンボジアです。カンボジアは、ここにポル・ポト時代と書いてありますが、1971～75年、アメリカ軍

によるカンボジア戦争がありました。1975年の4月に戦争が終わりました。その直後からポル・ポト時代がはじまりました。当時はポル・ポト時代といいませんでしたが、1975年から1979年の1月までを総称して通常ポル・ポト時代と呼んでいます。この時代に起こったことは、中世の物語かとさえ思うようなことです。これはタイの国境の難民たちです。こちらは「キリング・フィールド」という映画がありましたが、国内にはこのような虐殺現場がいたるところにありました。はじめは日本は嘘だ、捏造であるといわれていましたが、実は本当でした。この写真の男性は幹部です。ポル・ポト時代の幹部です。地区長、例えば中国地区とか関西地区といった地区のトップの人で、なかなかの権力を持っていた人です。私が会ったのは新政権によって造られた再教育センターという所の中でした。捕らえられて再教育を受けていました。ポル・ポト時代の幹部は今日にいたっても死刑というのがありません。多くの人が再教育を受けて村に帰れるということです。首相のポル・ポトはタイとの国境で亡くなりました。その次のナンバー2だったイエン・サリーという人は今プノンペンでしっかりと健在です。ここにいる女性たちは寡婦です。どうして夫は殺されたのかと聞きましたら、「男だから」という答えでした。男性は体力があるから危ないという意味だったそうです。その言葉を実は私はコソボでも聞きました。セルビア武装勢力によって男だから殺す、と。ボスニア・ヘルツェゴビナの戦争でも同じようなことでしたね。これは1980年に会った男の子です（写真D）。スコールの中を、たくましいなと思いました。こういうふうにスコールの中を駆けるような子どもがいるということは、カンボジアはつぶれない、大丈夫だということを実感しました。非常に悲嘆にくれていただけに私としては勇気づけられました。

写真D

次の写真のアフガニスタンは今でも戦争です。今度は「オバマの戦争」となりはじめているようですね。イラクが「ブッシュの戦争」といわれたことについで、アフガニスタンはかなり大変になってきて心配です。これらの写真はブッシュ政権時代ですが、誤爆ということでやられた民間の人たちの家があったところです。もちろんほとんどの方が亡くなりました。これはカブール市内ですが、地方のような感じもしますが、このような状況です。私が車で通っていたら、野生のチューリップを摘んだ姉弟がこの花束を持っていました。後ろにあるのは、大きな豪邸に見えますが、集合住宅で、遺跡のようになっているくらい壊れています。壊れているのですが、彼らの建物というのは外側に大きな高い塀を建てるために、中が壊れても外からみるとこのように見えるんですね。この写真は隣の家にアメリカ軍の爆弾、「誤爆」という爆弾が落ちて、心に大きな傷を受けた少女です。こちらの少女は実は、車椅子に座っています。両足がありません。母親と一緒に牛を放牧しながら、草むらを歩いていたら地雷を踏んでしまって、牛と母親は即死、彼女は両足を失いました。彼女の表情から何も説明することはないかと思います。この写真の建物も全部塀だけです。中は何もありません。次のこの家族は地方から戻ってきました。カブールなのですが、戻る途中にお父さんは地雷を踏んで右足を失いました。次は兄妹です。12歳の妹。二人の母親はタリバンに攻撃されて命を落としました。

次の写真は、アフリカのスーダンです。ダルフールは紛争となっていて大変問題になっています。撮影は禁止

されているのが現状です。この写真は南スーダンです。和平協定が結ばれたのですが、なかなか平和が訪れにくいという状況が続いています。靴磨きの男の子です。彼の表情から平和は遠いという感じを受けました。和平協定が結ばれたのだからということで、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が、他の国に難民となっていた人たちを帰国させました。この少年は難民キャンプで生まれました。はじめて自分の国であるスーダンという地に足をつけたところです。まだまだ不安が続いていて、難民キャンプというか、国内ですから避難民キャンプがいたるところにあります。この人たちは、たくさんの物語を持っている一家族です。今度またお話したいと思います。

次はポーランドです。アウシュビッツがありました。アウシュビッツのビルケナウです。この線路が終点です。向こうのほうにかすんで見えるのが「死の門」です。列車がヨーロッパ中からユダヤ人を中心とした人たちを送り込んでこの門をくぐったのです。ここで労働の組とガス室組にわけられました。これはガス室です。しみのようなのは、チクロンＢというまさにそのガスのしみです。左の丸いドーナツ状の穴から、熱風が送り込まれて・・・毒を増すためですね。真ん中にある長方形のもの、ここがドアです。ここから人がこの中に、シャワーをあびるようにということで入れられました。そして、ガスの密室になったわけです。丸い小さなものがドアについていますが、これはのぞき穴です。SSマンが目的は達することができたかとのぞいたものです。囚人にされた人たちのメガネです。これは三段ベッド、建物の中です。この人はアウシュビッツの中で自分の写真を見つけました。腕には刻まれた番号が残っています。この人は画家ですが、本当に物語がたくさんある人で、ユダヤ人です。アウシュビッツに行く列車から飛び降りて、命をまぬがれた人です。しかしそれだけではないたくさんの物語があります。この女性は当時9歳でした。子どもでドイツ人に近い顔立ちを持った人はドイツ人の子どものいない人たちの子どもになることを強いられました。彼女はそういう歴史を抱えた人ですが、家族、両親、兄弟、全部ポーランドで殺されました。時間がないので物語の説明はできませんが、次の何かの機会にでも。

そして、広島です。原爆ドーム1984年の写真です。今とはちょっと違いますね。8月6日の朝のお参りです。灯籠流しです。被爆した女性の手です。10本の指のうち、5本の機能を失いました。指の持ち主はこの方です。清水ツルコさんといいますが、夫はニューギニアで戦死。一人の息子と幼い弟を彼女は5本の指で着物を縫いながら育て上げて、本人は今はこの世にはいませんが、息子さんやお孫さん、ひ孫さんにあたる人たちがすくすくと育っています。山岡ミチコさん。彼女は本当に美人です。池田精子さん。ここではダンスを習っていましたが、今はダンスの先生になっています。彼女はなかなか子どもが生まれなくて、やっと一人生まれて、お孫さん5人になり、今は大勢の家族になりましたと喜んでいます。原弘司さん。当時見たものを描きました。けれど今はこういう絵は描きたくないとおっしゃって、原爆ドームを毎日描いておられます。病気にもなりました。これは槻山さん一家です。一番奥にいる方が娘さんの恵美さんで被爆二世ですね。おじいさん、おばあさんとお父さん、お母さん、そしてご本人です。これは取材拒否の方の家です。取材拒否、撮影拒否、たくさんあります。私がお目にかかった人たちの何倍もの、何十倍もの人たちが辛さを抱えながら取材を拒否し続けています。それはなぜか。被爆を知らない私たちが差別をしたからでもありますね。それが大きな理由です。もちろんそれだけではありません。あの恐怖を思い出したくないというのも理由です。それから逃げる途中で、「助けて」という声を振り切って自分が逃げてしまったことで、生きているのが申し訳ないという思いからの人もいます。大勢のそうした声を聞きましたし、まだ聞いていない声はもっとたくさんあると思います。

大久野島の倉庫です。大久野島の近海から不発物が見つかりました。環境庁の大臣が8月には検査、調査するということを発表していましたが、6600トン以上がこの島で作られたそうです。その多くが中国大陸に送られました。この島で働いていた夜船さんの背中です。全身がぶつぶつになっていますが、これは石のように見えますが、たくさんの火ぶくれのあとです。体調がものすごく悪いです。ここで働いていた人は今ではかなり少なくなってきました。秘密裏に毒ガスが作られていて、どんなことがあっても辞めて自由になることはできなかったそうです。やめたらすぐに中国大陸に送られたというケースがほとんどだったと聞いています。

チェルノブイリで被爆した子どもたちです。チェルノブイリでは原爆ではないのですが、たくさんの放射能をあびて、私も何度か行きましたが、本当に子どもたちは全員病気だといっても過言ではないくらいですね。事故は1986年です。これは広島市内の被爆の桜です。被爆した木から新しい芽が出て次の木を作っている。その被爆の木は何本もありますね。これもその一つです。次の世代につないでいこうという植物の強い意思が感じられると思っています。そして平和公園に折鶴を奉納する子どもです（写真E）。次の世代に戦争が伝えられていくこと。それこそが広島での役目ではないかと思います。

写真E

私はかなりいろいろな国々へ行きますが、広島を知らない人はいないくらい、東京を知らなくても広島は知っているというくらい、広島は世界中で有名です。この世界中で知られた広島から平和を発信するということは、被爆者当人にはなかなか辛くてできることではないですよね。ご当人はあの恐怖の中に今も生きておられます。そしてたくさんの病気を抱えておられます。入退院を繰り返しています。そういう中でも語り部の方たちはいらっしゃいます。けれども、それを世界中に、日本国内に伝えていくのは、次の世代の私たちの役割ではないかと思います。被爆者は自分がやられたことばかりをいうけれど、それはおかしいんじゃないかという声もありますが、それはとんでもないと私は思います。私を含めて、次の世代を担う人たちがそういうことをやっていかなくてはならないのではないでしょうか。中国新聞に、ひろしま子ども平和会議を8月6日に催すということが掲載されていました。広島の心を世界にと、イベントの3回目になる今年は日本中の子どもたちの会議をするというその記事を見つけまして、とても励まされる思いになりました。次世代に、若い世代に、戦争を繰り返さないことの大切さを伝え、繋いでいきたいと強く思っています。「若い世代に伝える戦争の記憶」というテーマをいただきましたので、今日はこのような写真を紹介しつつ話をしました。ご静聴ありがとうございました。